

送る、ということ

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年 迎 沙梨葵

白く囲まれた部屋の中、たくさんの管につながれ、潔癖すぎる布団に身を包まれた父は、その痩せ細った顔で私を見た。意識が朦朧もうちょうとしているのか、眼めの焦点がなかなか合わない。私の眼に映るこの人は、もう父ではない気がした。以前の、きっちりとし、いつも少し不機嫌そうな面影はすっかりなくなってしまった。私は時計を見てから、父に「父さん、学校に行ってくるね。」と伝えた。父は薄く開いた眼で私を見て、少し考えた後に「ああ…、学校か。」そして「いつてらっしゃい。」と力なく私に言った。その顔もまた力なかったが、確かに父は笑顔で、私も笑顔で「いつてきます。」と返して病院を出た。不意に、手術頑張つてね、と伝えるのを忘れたと思った。そしてこれが、父と最後に交わした言葉になってしまった。ガン、という病魔が父を襲い、あつという間に、この世から連れ去ってしまった。最期も、話せる状態ではなかった父。呼吸器の音に合わせた不自然な胸の動き、腫れた腕は黄色く変色してしまっていた。父に二度と会えなくなる瞬間が近付いている、そう思った矢先に、心電図はゼロを示した。死んでしまったのだと、ぼんやり思った。

父が亡くなって、一週間二週間と過ぎていった。少しずつ父の面影を見つけては、哀かなしいと感じる機会が増えてきた。まだ吸い殻の残っている灰皿、父の好きだった町の中のケーキ屋、読書家だった父の積まれた本。確かに少し前までは、父はここにいた。それがもう、私の目の前に姿を現すことはなくなってしまった。それはつまり、二度と話すことができないということ。じわり、と涙が浮かんでくるのが分かった。しかし、その涙は単純に父の死を哀しむものだけではないということも分かっていた。

私の父は、いわゆる堅物だった。何事においても真面目で、それでいて少し暴君。私の六歳離れた兄が中学生になる頃には、夫婦喧嘩げんかも増え、どこかぎこちない雰囲気けんきが家族に流れ出した。重ねて、不況と父の体調不良からくる仕事の行き詰まり。私が高校生になる頃には、すっかり私たちの間には大きな溝ができてしまった。そんな中、父は急死してしまつたので、私の心には「父は幸せだったのか、家族を愛してきてくれたのか」という大きな疑問がわだかまりとして残ってしまった。逆に問われれば、私は父を愛していたし、この十七年間で幸せなものだったと胸を張って言える。時には、毎日苦虫をかみつぶしたような顔をする父を恨んだこともある。離婚してしまえばいいのに、と母になにげなく言ったこともあった。それでも、父が亡くなった今では、兄妹三人をここまで育ててくれたこと、小さい頃に、遠い所まで連れていってくれたこと、そして、何より父の曲がったことが嫌いな心の正当さが、私は好きだったのだ。でも、そう気づけたのは父が亡くなった今の話で、私は一言も伝えてない。私も、何も父から聞いていない。そういった後悔がだんだんと襲ってきたのだ。テレビドラマで観みるような感動の臨終もなかった。最後にあつた時、少しでも私の気持ちを伝えればよかった…。そう思ったとき、私は最後の言葉はなんであつたのか考えた。そして思い出したのだ。「いつてらっしゃい。」であつたと。

「いつてらっしゃい。」と言ったとき、父の心情はどんなものであったのか、私は考えた。父は鈍い人ではない。きつと、どこかで自分の最期が近いことも気づいていたはずだ。そんな中、「いつてらっしゃい。」と私を送り出した父。「いつてらっしゃい。」という言葉がとても単純な言葉ではない気がした。この言葉はただの挨拶じゃなくて、相手を「今」から「未来」へ送り出す言葉。そう思った瞬間から、父は家族に欠かさず「いつてらっしゃい。」と言っていたことに気づいた。例えば喧嘩した翌日でも、体調が悪く寝込んでいる日でも。そうか、と私は思った。父は、そのとつてもとつても不器用な性格で、私たちに「いつてらっしゃい。」と、家族を未来へ送り出してきてくれたのだと。「未来」には必ず「希望」がある。わずかでも、その「希望」へ送り出す言葉。それが「いつてらっしゃい。」なのだ。なんて優しい言葉、なんて温かい言葉なんだと私は気づいた。私の背中を、「いつてらっしゃい」という温かい言葉の塊で、父は押してくれていたのだと感じた。父はいつだって私たち家族を愛し、応援してくれていたのだ、そう気づけた時、心がとても温かくなった。

例えば、毎朝のように地域の人は家を出た私に「いつてらっしゃい。」と声をかけてくれる。私は今まで、社交辞令のように、なんとなく返事をしていたが、その「いつてらっしゃい。」も私の未来を応援してくれる優しい言葉であると考えたいと思う。そうして、いつか私が大人になった時、周りの大切な人を愛し応援していきたい。「いつてらっしゃい。」と、笑顔で。父のように。